

二十歳の誓い

20年前の阪神淡路大震災の時、私はまだ生まれたばかりで、全く記憶にはありません。でも4年前の東日本大震災の衝撃的な映像は、今もはっきりと覚えています。テレビから目が離せず、町が津波にのまれていく様子をただただ見ていることしかできませんでした。当時、青少年赤十字の活動をしていた私は、街頭募金の呼びかけを通して復興支援にかかわっていました。そして震災から1年後の3月、全国規模のリーダー研修に参加しました。そこには岩手・宮城・福島の前北3県をはじめ、茨城など被害の大きかった北関東のメンバーも参加していて、そこで初めて被災した人の生の声を聞き、私は再び衝撃を受けました。

ある男の子は、部活終わりに鍵を職員室へ返しに行った友人を校門で待っている時に被災し、自分はなんとか助かったものの、学校へ戻った友人とはそのまま二度と会えなくなった。また、ある女の子は、避難中に津波にのまれ流されていく友人の姿を見た。みんな泣きながら話してくれました。そして「あの日々を生き延びたからこそ今日ここでみんなと出会えた」という言葉が胸に突き刺さりました。自身も被災者でありながら、震災直後から現地で救援に携わった方の話も聞かせてもらいました。「ただ生きていてほしい」と私の手を握った手にはすごく力がこめられていて、だけど優しく温かかったです。生きていることを強く実感し、生きていることに感謝するきっかけになりました。京都は被災地から離れているので募金活動くらいしかできないと思っていましたが、もっと遠くに住んでいながらも、積極的に被災された方の声を聴き、自分のできることでニーズに応じたボランティア活動をしている他県のメンバーの話も聞きました。テレビや新聞のニュースで知っていたはずの震災でしたが、被災された方から直接話を聞いたり、ボランティアの在り方を学んだことで、私のそれからの人生が大きく変わったのです。

私は現在、滋賀大学教育学部で小学校教員になるための勉強をしています。専門は理科の防災教育です。被災地は未だ復興の途中ですが、震災の記憶の風化が進んでいるのは事実です。被災した彼ら彼女らの記憶と想いを、震災を知らない人や次世代の子どもたちに伝えていくことが、これからの私の使命だと思っています。

自然災害はいつ起きるか分かりません。いざというときに何が大切か？もちろん、どこに避難すれば安全かといった専門的な知識も必要です。ですが、それだけでなく、自分で考えて行動できるかどうかで生死を分けるのです。全員が自分の命は自分で守るという意識を持って進んで行動することが、結果的にみんなの命を守ることに繋がります。私は教育者として、防災教育を通して子どもたちに身を守る方法を伝えていきたいと思います。そして、いざというときには率先して考えて行動することで、一人の大人として地域の子どもたちを守れる大人になることを誓います。

今日は私たちのために、このような盛大な記念式典を開催いただきまして、本当にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

平成27年1月12日 新成人代表 宮本 佳蓮